

UPの多義性

—メタファーから考える*—

98E066 大矢 寿 和

1. UPの基本的なイメージ；動き、動作を表すUP**

大修館Genius英和辞典によると、UPは「上方への方向を示す副詞辞。動作動詞と結びついて上への運動を、状態動詞と用いて上方での静止した結合を作り、多くの比喩的意味を表す」(Genius² 1994: 1964)とある。大きく分けてUPは三つの意味に分けることが出来る。

- (i) 動き、動作の up
- (ii) 動作の完了を表す up
- (iii) 事態の生起を表す up

また、大西・マグウェイ(1997)によると、UPは「上」という何の褒哲もないイメージから、ネイティブは実にさまざまな意味を取り出すとある。まずここでは(i)を扱う。はじめに(i)動き、動作のUPについていくつか例文を挙げる。

- (1) Plants come up in the spring.
- (2) The birds flew up in the sky.
- (3) He got up from his chair.

ここに挙げた(1)から(3)の例文はいずれも「上方への運動・動作」を表すUPの用法である。その対象となるものの「下から上へ」の動きや「上」という位置関係を表した文である。(1)の文は植物がすくすくと上に向かって伸びていくという意味である。これは、地球上の重力に対して上下を認識せざるを得ない私たちの生活から生まれた文である。(2)は鳥が空(上)に飛んでいくという意味を表しており、(3)は椅子から立ち上がるという意味であり、すべての文は物理的に上の方向を示している。

2. UPの基本的なイメージ；動作の完了を表すUP

ここでは、1節で分類した(ii)を扱う。まずは例文を提示する。

- (4) She showed up at last.
- (5) The matter came up for discussion again.
- (6) I turn the radio up.
- (7) The fire burned up.
- (8) 完成〔終結〕した状態に；完全に、まったく、すっかり(…してしまう) Drink up. 飲み干せ/eat up全部食べてしまう/pay up(借金を)全額返済する/clean up the room部屋をきれいに片付ける/Finish it up now!今のうちにそれを全部すましておきなさい/The house burned up.家が全焼した/The money's all used up.お金をみな使い果たした ((4) ~ (7): Genius² 1994)

(4) から (7) の例文はいずれも量に関する上昇を意味している。(6) (7) は、ラジオのボリュームが上がった様子や火が燃え上がった様子を、UPを使って示している。Lakoff and Johnson (1980) では、この理由について次のように述べられている。

MORE IS *UP* ; LESS IS *DOWN*

The number of books printed each year keeps going *up*. His draft number is high. My income rose last year. The amount of artistic activity in this state has gone *down* in the past year. The number of errors he made is incredibly low. His income fell last year. He is underage. If you're too hot, turn the heat *down*.

Physical basis : If you add more of a substance or of physical objects to a container or pile, level goes *up*. (Lakoff and Johnson (1980))

つまり、量や質などが良くなったり、増えたりすることを、UPを利用して表現しているのである。例えば、(4) の例文は「彼女はついにやってきた」という意味である。この文は、彼女が、その相手の所へ到着した (=相手に近づく、存在が大きくなる) という状況をUPの基本的意味「上」の意味のメタファーを使って表しているのである。また、(5) のように、注目を浴びるような場合にも利用される。(5) の場合は、注目を浴びる = たくさんの人に話題として取り上げられた様子や、注目を浴びている人物が、周りの人々に持ち上げられている様子をUPのメタファーを利用して表していると考えられる。(8) は量が増えることにより、量が増加してあふれそうになっている (=完全に) 様子を、UPを使って示していると考えられる。例えば、「食べ尽くす」、「飲み干す」は、ともにすべての量を食べたり飲んだりしたという意味をUPのメタファーを使って表している。

また、UPは「状態動詞 + up」の構文で状態を表す。

(9) The river is up.

(10) He lives five floors up.

(11) What's up ?

(12) Prices are up.

(13) The whole town is up.

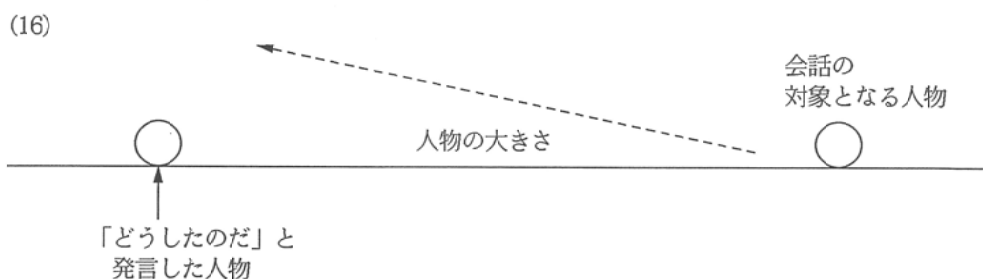
(14) Time is up.

(15) It 's all up with her.

((9)~(15) : Genius² 1994)

(9) (10) は先ほど述べたように動作の意味が状態を表すようになったものもある。では、(11) は、なぜ「どうしたのか」という意味が生まれるのだろうか。Lakoff and Johnson (1980) では、この理由について次のように述べられている。以下レイコフの本から引用する。「(11) の例文は、肉体上の基盤：普通われわれの目というのは一般に自分が (先や前へ) 進むその方向を見る。ある物体が人に (あるいは人のほうがある物体に) 近づく時、その物体は大きくなってくように見える。地面は動かないものとして知覚されているので、その人の視覚の中では物体の上部が上に向かって動いていくように見える。」このことから、〈予知できる未来のこと

は上(かつ前方)であるといえる。だから、(11)の例文は「何がもち上がっているのか。(=どうしたのだ)」という意味になる。また、星真知子(個人談話)によると、ある対象となる人物が、近づいてくれば、その人は大きく見える。また逆に、大きく見えるということはその人物が近づいてきている。「どうしたのだ」ということは、相手に対して尋ねる言葉であり、つまり、視点が違っても表現の仕方は同じことから、What's up?のUPは先ほど述べた、上方への動作・動きのupの用法のメタファーであるともいえる。これを詳しく(16)に表す。



(16)のように、「どうしたのだ」と発言した相手にとって、《尋ねられている人物が近づく=存在が大きくなってきている》という事を示している。この接近から存在が大きくなるという意味の拡張から出来た文だと考えられる。

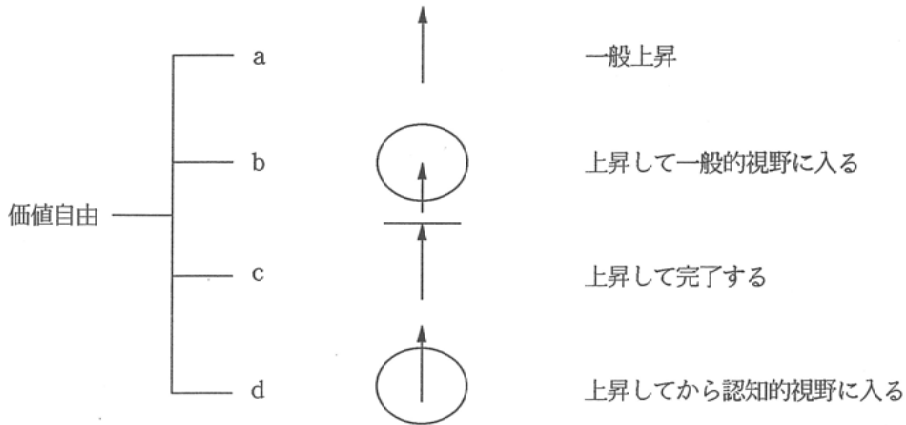
また、(9)、(12)は先ほど述べたレイコフの述べるMORE IS UPにも関係した文である。どちらも、量が上がっている。価値についてはLindner (1981)が、句動詞(make upなど)の一部に現われるupに関する初の本格的研究を行っている。当然、メタファー分析が検討の中心になる。瀬戸(1995)はLindner (1981)について次のような考えを示している。以下、瀬戸(1995)に従って説明する。

Lindner (1981)によると複雑な「上」のメタファーを整理する第一歩は、「上」が価値と結び付くかどうかを見きわめることである。この基準に基づいて、四種を区別する。

- (17) 価値自由
- (18) 価値拘束(プラス)
- (19) 価値拘束(マイナス)
- (20) 投射表現

(17)の価値自由な「上」の表現は、一般的な「屋根に上がる」や「座敷に上がる」という本動詞表現以外にも、「起き上がる」や「立ち上がる」などの補助動詞としての用法に広がる。また、「高地」や「高層」、あるいは「高い山」の「高」も、価値に関して自由な(中立的な)表現である。ところが、メタファーとしては、価値が拘束され、程度、尺度を表し、度数が増すことを意味する。上下の軸が用いられるのは、これがもっとも目立つ軸であるからである。

例、「物価が上がる」「速度が上がる」「血圧があがる」「高利」「高熱」など。



ここで明らかにしておきたいことは、この考えはレイコフの MORE IS UP の考えとほぼ同じ考えであるということである。例えば、(9) は川の水が増加している状況を、UP を使ったメタファーで示している。また、(12) も同様に物価の値段が上昇していることを示している。以上のことを踏まえると、(9) (10) (12) は、明らかに上の方のメタファーが使われているということがわかる。つまり (i) の上方への動きを示す UP の意味的拡張であるということが分かる。

3. UP の基本的なイメージ；事態の生起について

ここでは1節で示した三つのUPの意味のうち、(iii) の事態の生起を表すUPについて考察する。まずは、例文を提示する。

- (21) 無活動 [停止、休止] の状態に；貯蔵 [保管] して The car pulled up. 車が止まった/be laid up with a cold かぜをひいて休んでいる/store up food for the winter 冬に備えて食料を蓄える/save up money to buy a car 車を買うためにお金を蓄える
- (22) しっかり固定した [閉じた、ふさいだ、結合した] 状態に；ぎっしり詰めて pack up 荷造りをする/stop up a hole 穴をふさぐ/fold up the papers 書類を小さくたたむ/board up a window 窓を板でふさぐ/tie up the parcel with string 小包にしっかりひもをかける
- (21)~(22) : Genius² 1994)

ここに示した例文はいずれも事態の生起を示した文である。いずれもUPのメタファーを利用した文であり、完了した状態、又は完了しようとしている状態を示している。では、なぜUPが事態の生起を示すのだろうか。例えば、(21) の The car pulled up は非常に (14) の例文にイメージが近いと考えられる。先ほど、2節で述べた視点が関わってくる。自分を中心として時間が自分に近づいてくる、存在が大きくなる=時間の終了というイメージが生まれる。これに関連して、pulled up は状況の終わり=終わり(止まる)となり、車が目的地に近づいてきているが(または目的地に着いたのかもかもしれないが)、止まってしまった状況・状態を示している。

また、be laid up with a coldかぜをひいて休んでいるは、風邪をひいたのでベッドの上で休んでいるという状況をupを使って示しているのである。残りのstore up、save upについては、ともに食料・お金を蓄えて増えている様子を、UPを使って示しているのである。これは、(9)の考えに非常に近い。

ここで少し細かく考察してみると、(22)は、2節で述べた(8)の「完全に」という状態の意味の拡張であると考えられる。「完全に」という意味で使われているupを動詞と共に使用することにより、例えば、pack(荷造りをする)+upで「荷造りを完全に作る」という意味になる。荷造りを完全にした状態からバックに荷物をぎっしりと詰めたようなニュアンスが生まれていると考えられる。他の例文においても同様である。従って、次のようなことが結論できる。つまり、動詞の表す動作が完全に終わっている状態のUPの意味の拡張であると考えられるのである。

また、(11)What's up?は事態の生起としても考えられる。2節で述べたように、「どうしたの?」と尋ねられている人物が、尋ねている人物の前に現われた(接近し、姿を現した)状況(=活動を行った状態)を、UPを使って示しているのである。

4. 空間における上下の概念

ここまで上方への動きということを無批判に使ってきたが、ここで、上下の概念ということ詳しく考えることで、UPの意味のメタファー的拡張の素地、あるいは動機づけを明らかにしたい。瀬戸(1995)では、上下のメタファーについて、次のように記述される。以下、瀬戸の本から引用する。

アリストテレスは、「場所はすべて上と下をもっている」(『自然学』)と述べている。火は上に、土は下というように、すべてのものには、それにふさわしい場所があるという。「上」は、「明」「軽」「乾」などと、「下」は、「暗」「重」「湿」などと結びつくだろう。

ここには、すでに、価値の問題が入り込んでくる。例えば、「明暗を分ける」という。また、「軽快」に対する「鈍重」、「からっとした性格」に対する「じめっとした性格」。さらに、倫理面では、上下のメタファーは、向上と墜落の象徴を生む。高邁な精神と脱落した魂、気高い理想と低劣な欲望などの対立的認識は、いずれも上下による倫理的規範に基づいているだろう。上下のメタファーは、内外のメタファーと並んで、最も重要な認識上の軸をなしているのである。

視点を地上に据えてみれば、上下のメタファーは、生長のシンボリズムと照応する。植物に代表されるように、地上のものはすべて、生長の過程で上を目指す。子供の成長と植物の生長とは、パラレルな現象であると感じられているのではないであろうか。子どもが「すくすくと」成長するのは、植物が「すくすくと」生長することと並行的なのであろう。エリアーデは、「生命は植物の象徴を通して顕現する」(『豊饒と再生』)という。また、バラシュラールは、「イメージの世界では一切が生長する」(『空と夢』)という。生長せんとする意志は、おそらく生命そのものと等価なのであろう。(瀬戸1995:211)

要するに、瀬戸の主張は、上下のオリエンテーションは、生物の生長などからくる生物の認識と平行的な価値判断を与えられているのであり、上へ向かうオリエンテーションは正の価値

を、下へ向かうオリエンテーションは負の価値を与えられるということである。瀬戸は上へのオリエンテーションを示す言語表現は下へのオリエンテーションを示す言語表現よりも複雑なネットワークを成しており、これは「背の高さ」とは言うが、どんな背の低い人に関してもふつうは「背の低さ」とは言わないことから分かるとしている（瀬戸 1995 : 226）。つまり、上へのオリエンテーションは中立的な価値から正の価値までをカバーし、下へのオリエンテーションは負の価値だけをカバーする、ということになる。

また、Lakoff and Johnson (1980) は上下の概念について次のように述べている。以下、Lakoff and Johnson (1980) から引用する。

ある概念が他の概念に基づいてメタファーによって構造を与えられているケースだけではなく、メタファーによって成り立っている概念には別の種類のものがある。ある概念が他の概念に基づいて構造を与えられているのではなく、概念同士が互いに関係し合っひとつの全体的な概念体系を構成しているのである。「方向づけのメタファー」というのは、これらのメタファーの大部分が、空間の方向性に関係があるからである。空間の方向性は、われわれの肉体がそうした方向性を持っているということ、そして、その肉体が物理的環境の中で機能しているという事実から生じている。(Lakoff and Johnson (1980) [渡部・楠瀬・下谷 (訳) 1986 : 18])

例えば、空間における上下の概念は、縦の軸を基準に認識をしている。それは、重力のある地球に住んでいて、重力が規準となって生活をしているからである。

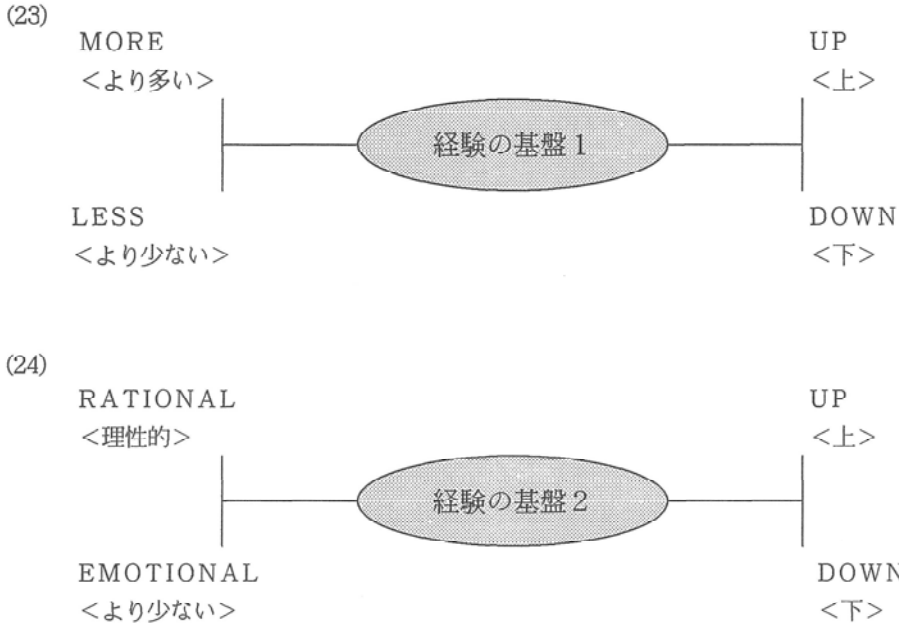
またLakoff and Johnson (1980) によると、上下の概念は、動機づけとして基本的な生活の経験が基盤となる。以下、レイコフの本から引用する。

空間関係づけのメタファーは肉体的（物理的）経験および文化的経験に根ざしている。メタファーというのは、経験という基盤があってはじめて、ある概念を理解する手段となりえるのである。

<メタファーの基盤となっている経験>

メタファーの基盤となっている経験について筆者たちも必ずしもよくわかっているわけではない。したがって、各種のメタファーを個々に述べ、その後、おそらくこうであろうと思われる経験の基盤を註として付け加えるだけにしておいた。それは筆者たちの無知のためにそうしたままで、何か方針があってそうしたわけではない。実際のところ、どんなメタファーも、その経験上の基盤から切り離しては理解できないし、また、切り離せば適切な表現ともなりえない。例えば、MORE IS UP というメタファーと HAPPY IS UP や RATIONAL IS UP というメタファーでは、その経験の基盤はまったく異なっている。「上」(UP) という概念は同じであるけれども、UP というメタファーの基盤になっている経験がまったく異なっているのである。さまざまな異なったUPがあるというのではない。というよりは、垂直性という概念がわれわれの経験の中にさまざまな異なった形が入っているのである。その結果、さまざまな異なったメタファーが生じたのである。

メタファーがその経験の基盤と切り離せないことをはっきりさせるひとつの方法は、経験の基盤を図に表して見ることだろう。



このように図示してみれば、それぞれのメタファーの二つの部分が経験という基盤を通してのみ結び付けられていることがよくわかるし、また、経験という基盤を通してはじめてメタファーは理解という目的にかなうのだということがよくわかる。

それぞれ異なった種類の経験に基づいているためにぴったりと一致しないメタファーの働きを理解する上で、経験の基盤がはたす役割は重要である。

そして、この経験上の基盤を軸として、さまざまな領域に意味を拡張していくのである。(Lakoff and Johnson (1980) [渡部・楠瀬・下谷 (訳) 1986 : 27])

ここでLakoff and Johnsonが言っていることは、人間は、ものが多いとか少ないとか、理性的であるとか感情的であるとか、そういったことを認識する場合、空間的なオリエンテーションとしての上下を介して理解するが、それは人間の身体感覚がもとになって出来ることである、ということである。メタファーは、周知のように、伝統的に二つの概念の比較であると言われてきたが、ここではものが多い・少ないや理性的・感情的といった意味的な領域が、人間の身体感覚に根ざす上下のオリエンテーションとの関係で理解されるのが、上下のメタファーであると考えることが出来る。

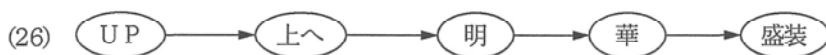
5. 分析の提示

5.1 「華やかな場」とUP

ここで、上にあげた、瀬戸とレイコフの考えをもとに、例文を提示し、どのように意味が拡張していくか考える。UPの意味的拡張の全てを網羅的に調べ上げる準備は筆者にはないが、いくつかのUPのメタファーに関して述べる。

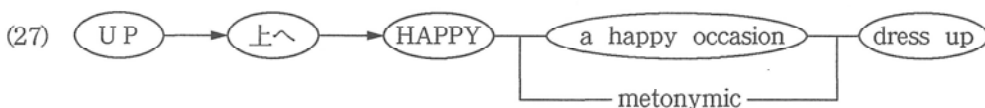
(25) She dressed up for the party.

(大西・マクヴェイ 1997)



例えば、(25) の例文について説明すると、彼女はドレスアップしたという意味であるが、4節で提示した瀬戸の考えをもとに分析していくと、(26) のような図式で示すことが出来る。UP は先ほど述べたように「上へ」という基本的概念がある。上には万物の象徴の太陽があり「明」というイメージが生まれる。「明」ということは明るく、華やかであり「華」というイメージを生む。「華」はこの場合、ドレスアップの「盛装」を表すことが出来る。このようにUP という一つの語から意味を拡張することが出来るのである。

では次に、レイコフの考えをもとに図を示す。(27) を見られたい。



先ほどと同じように、UP は「上へ」という基本概念から「HAPPY」というイメージが生まれる。「HAPPY」はこの場合パーティに出席することを表しており、「a happy occasion」(楽しい場) というイメージが生まれ、「dress up」につなげることが出来る。図 (27) で示したように、HAPPY と a happy occasion と dress up のつながりは換喩的 (metonymic) である。つまり、幸せと幸せなことをしている場所とは、近接性での繋がりを持つ。

5.2 動作の完了した状態を表すUP

次に、1節で(ii)と分類したMORE IS UPに関連した(9)を考え直してみる。例文は以下に繰り返しておく。

(9) The river is up.

(Genius² 1994)

これを2節で行った分析を、意味の拡張という観点から見ると、(28) のような拡張があったのではないかと考えられる。



UPの基本的概念「上へ」という意味から、水面が上昇することは増加するというイメージにつながり、「The river is up.」となる。

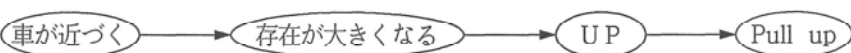


UPは「上へ」という基本概念から「MORE」というイメージが生まれる。「MORE」はこの場合、川の水が増加していることを示す。Lakoff and Johnson (1980)の言う、MORE IS UPのメタファーの拡張であると考えることが出来ることはこれまでも述べてきたが、Lakoff and Johnson (1980)より一歩踏み込んで、(28)や(29)のような意味の拡張があったと主張するのが、本稿での立場である。

5.3 事態の生起を表すUP

最後に、(30)の事態の生起のUPについて考えてみたいと思う。

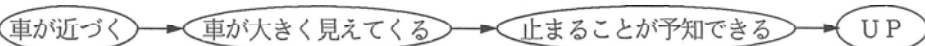
(30) Pull up over there next to the blue car, will you?
(大西・マクヴェイ 1997)

(31) 

```

graph LR
    A(車が近づく) --> B(存在が大きくなる)
    B --> C(UP)
    C --> D(Pull up)
  
```

3節で述べたように、事態の生起は、2節で述べたような完了の意味の拡張であると考えられる。(30)の会話を行っている人物を中心に車が近づいてきている状況を思い浮かべてもらえば理解しやすいと思う。徐々に、当事者は車が近づいてくれば、車が大きく見えてくる。大きく見えてくるということは、当事者にとって、車の存在が大きくなっていくことを意味する。ここで、(28)の例文と異なる事は、すでに車を止めるという行動が終わっている点である。ここで注意しなければならないのは、次のことである。確かに、例文は「青い車の隣に止めて」という文であり、まだ動作自体は終了していないが、「止める場所の決定」＝「事の完了」をイメージさせていると考えられる。そこで、「存在が大きくなる」＝「事態の完了」＝「UP」というつながりが生まれる。

(32) 

```

graph LR
    A(車が近づく) --> B(車が大きく見えてくる)
    B --> C(止まることが予知できる)
    C --> D(UP)
  
```

Lakoff and Johnson (1980)では、FORESEEABLE FUTURE EVENTS ARE UP (and AHEAD) というメタファーを挙げて、次のように記している。「普通われわれの目というのは一般に自分が(先や前へ)進むその方向を見る。ある物体が人に(あるいは人のほうがある物体に)近づく時、その物体は大きくなっていくように見える。地面は動かないものとして知覚されているので、その人の視覚の中では物体の上部が上に向かって動いていくように見える。」つまり、ここでは会話を行っている人物に車が近づいてきている。(または、会話を行っている人物が「青い車の隣に止めて」と発話を行っているならば、車の運転手が言われた場所に車を止めるだろうということがある程度は予知することができる。)車が接近してくれば、車は大きくなっていくように見える。レイコフが説明しているように、発話を行っている人物の視覚の中では、車が上に向かっていくように見えるので、UPが使われる。これは(16)で挙げたWhat's up?のときの説明と基本的には同じであり、Something else came upなどのような、事態の生起を表すUPとも通じるところがあると考えている。

6. 結論

以上、UPの多義性をおもにメタファーの観点から見てきた。以下の点について述べてきたことになる。

1節では、動き・動作を表すUPについて「上から下へ」という動きや「上」という位置関係（物理的な位置関係）をもとに考察した。

2節では、動作・完了を表すUPについて「上から下へ」という概念をもとにレイコフのMORE IS UP ; LESS IS DOWNや、瀬戸の価値自由のメタファーを使った意味の拡張として考察し、MORE IS UPと価値自由の考えが非常に近い考えであるということを示した。

3節では、事態の生起を表すUPについて2節の「完全に」というメタファーの意味の拡張という観点から考察した。

4節では、空間における上下の概念を瀬戸の本、Lakoff and Johnson (1980) から引用し、UPの基本的意味について示し、またメタファーの経験的基盤について記した。

5節では、4節の瀬戸(1995)の理論、Lakoff and Johnson (1980)の理論を元に意味の拡張について分析し、UPの基本的概念「上へ」が元となって、意味が拡張しているという結果を記した。

本稿で明らかになったように、辞書の語義、とくに多義的な語の語義には、十分な注意が払われる必要があり、また辞書を使う際にも、このような単一の意味の拡張と考えることで、多義的な語の様々な意味を理解しやすくなるものと思われる。今後の研究課題としては、UPの意味的拡張をより精密に記述することで、UPのもつ意味の広がりをも明らかにすることと、他の小辞との関連を解明することである。

註

- * 本稿は2月5日に行われた、英語英米文学科の卒論発表会で発表の機会を得た。その際、貴重なコメントをお寄せくださった、北垣宗治学長、James Brown先生、松崎洋子先生、上野恵美子先生に感謝申し上げたい。また金山愛子先生と北嶋藤郷先生には指導教員を通してご指摘を頂いた。記して感謝したい。先生方に頂いたコメントに十分にお答えするには、紙幅が足りず、また筆者の力不足もあるので、今後の研究の課題とさせて頂きたい。

ブラウン先生の出してくださったmake upの例についてのみ、指導教員とのディスカッションをもとに触れさせていただくと、make upは「化粧する」、「(友達などと)仲直りする」、「(話などを)でっち上げる」といった意味が考えられると指摘された上で、ここでのUPはどのように説明するか、ということであった。ここにはイディオムとしてのmake up自体の多義性が感じられるが、それはともかく、「化粧する」と「(話などを)でっち上げる」の二つはおそらく相互に関連しているだろうと思われる。それに対して、「(友達などと)仲直りする」という語義は、「埋め合わせをする」という意味のI do apologize for all the inconvenience this has caused – I'll make it up to you somehowやNothing can make up for missing such a wonderful opportunityのような表現や、「おべっかを使う」という意味のPeople only make up to him because of his wealthなどの表現とも関係するだろう(例はLDOCE²より)。従って、「仲直り」のmake upはかなり構文的な要素が含まれており、単にupという語を従えたイディオム、ということでは十分でないと思える。

- ** 以下、本稿では「UP」のように大文字でparticleのupを示す。語の形式だけでなく、多義的な意味を併せ持つものとして、upを考えたときにUPと書く、と理解する。

参考文献

- 瀬戸賢一(1995)『空間のレトリック』海鳴社。
大西泰斗、ポール・マクヴェイ(1997)『ネイティブスピーカーの英語感覚』研究社。
安井稔(1978)『言外の意味』研究社。
佐々木賢一(1986)『創造のレトリック』勁草書房。
ポール・グライス(1998)『論理と会話』勁草書房。
渡部昇一、楠瀬淳三、下谷和幸(1986)『レトリックと人生』(Lakoff and Johnson(1980)の翻訳)大修館。
Lindner, A. (1981), *A Lexico – semantic Analysis of English Verb Particle Constructions with OUT and UP*. Distributed by The Indiana University Linguistics Club.
Grice, Paul (1975), "Logic And conversation," in Peter Cole (ed.), *Syntax and Semantics 3 : Speech act*, New York : Academic Press.
Lakoff, George, and Mark Johnson (1980), *Metaphors We Live By*, The University of Chicago Press.

例文採取資料

- 小西友七(1994)『ジーニアス英和辞典』大修館 [本文中はGeniusとした]。

(卒業論文指導教員 五十嵐海理)